
ノックの音と我慢

回線スピード計画

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ノックの音と我慢

【Nコード】

N3365Z

【作者名】

回線スピード計画

【あらすじ】

回線スピード計画の話

夜も終盤を迎えた真夜中、暇な大学生、青木はひとり、リビングにて小説を読んでいた。導入の上巻も読み終わり、さて下巻へ…と移行しようとした時、ふと玄関のドアがノックされた。軽い音がして、青木に訪問者が来た事を知らせる。

「ん…こんな真夜中に一体誰だ？」青木は少し警戒しながら、玄関の方へ向かい、覗き穴で玄関の外側を確認する。

玄関には誰も居なかった。見えたのは、蛍光灯で照らされただけの空間であった。

「…。いたずらか？」青木はそう考え、リビングに戻り読書を再開した。数十分が立ち、物語も終盤に向かい盛り上がり、青木が「こりや今日は寝ないで読破するかなあ」と考え始めていた時に、またノックの音が聞こえた。

「……………」青木は、今度は音を立てないようにしながら、玄関へと向かい、再度外側を確認する。やはり外側には誰も居ない。青木は意を決し、少し玄関を開けて首を出し、玄関の外のを確認したが、やはり人らしき物は見えなかった。ただ季節の虫が鳴いているのだけが聞こえた。青木は少しイライラしながら部屋に戻り、気分が晴れないまま、読書を再開した。青木は、またノックするんじゃないか？ と思った。

青木の予想通り、その後も同じ事が繰り返し替えされた。読書を再開した数十分後には、ノックの音が聞こえ、それを確認して戻り、また数十分後にはノックの音がする…。

青木は最初、これを無視しようと思った。『どこの誰かは知らないが、大抵こういう事をする奴は、相手が反応するのが楽しいからやるのだろっ、だったら無視するのが一番相手にとって面白くないだろっ』と考えたからだ。

しかしその考えも、何時間も連続で同じことを続けられると、揺

らいできた。数十分おきに来るノック。それを頭の中で無視すると考えていても、耳の中には確実に音が入ってくる。だんだんと意識の奥深くに、イライラが溜まって行った。

そして朝になる頃、ノック音のせいでページが全く進んでいなかった青木は、また定期的に訪れたあのノック音に、とうとう溜まっていたイライラが爆発した。

「…ふっざけんなああああ！ 一体誰だコラア！」青木はそう叫びながら、玄関へ走って行って、乱暴に玄関のドアを開けて外に飛び出し、周りを見渡す。やはり誰も居ない。が、それに構わず青木は、大声で罵詈雑言を見知らぬ愉快犯に浴びせた。

青木はしばらく罵詈雑言を浴びせていたが、少し時間が経って落ち着いて来ると、何だか相手の思惑に嵌っている様な感じがして、後悔した。「何だか…、疲れたな。もう良いや、今日は昼まで寝ていよう。ノックが来ても寝ていれば分かんねえし」青木はそう考え、玄関を開け、部屋に戻ろうとする。だが何故か玄関が開かない。ドアノブを引っ張っても、鈍い金属音がして止まってしまふ。何故か鍵が掛かっていた。「あれ？ オートロックでもねえのに何でだ？」青木は理解不能な現象に、思わずそう呟く。

その時、玄関のドアから、ノックの音が聞こえた。どうやら内側から叩いている様であった。

(後書き)

某スレに書き込む予定だったショートショート

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3365z/>

ノックの音と我慢

2011年12月11日16時56分発行